



TITLE:

事態認知に基づく構文の定義--コーパスベースアプローチ--

AUTHOR(S):

李, 在鎬

CITATION:

李, 在鎬. 事態認知に基づく構文の定義--コーパスベースアプローチ--.
言語科学論集 2004, 10: 19-40

ISSUE DATE:

2004-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66978>

RIGHT:

事態認知に基づく構文の定義

— コーパスベースアプローチ —

リ ジェ ホ
李 在 鎬

情報通信研究機構 けいはんな情報通信融合研究センター

jhlee@nict.go.jp

1. はじめに（本研究の目的と主張）

本研究の目的は二点ある。一点目に認知的構文理論に基づき、日本語の文現象を捉えることであり、とりわけ名詞との共起関係に注目し、構文（construction）を定式化する。ケーススタディとして移動や結果事象を表す文現象を取り上げ、分析を行う。二点目に語文法（lexical grammar）を主要な領域とする従来のコーパス言語学に対し、文文法（sentence grammar）におけるコーパス利用の具体的な分析手法を提案する（cf. Hunston&Francis 2000）。主としてコーパスデータに対して統計的評価指標を用いて分析する。これらの考察から最終的な着地として、日本語の文現象に対する新たな記述枠組の構築を試みたい。

本研究の理論面、記述面での主な主張は次のようにまとめられる。a) 英語を中心とする Goldberg 版の構文文法では、行き過ぎた抽象化を行ってきた。それによる理論面、経験事実面での問題点を具体的に示す。b) こうした問題点を解消するため、下位レベルスキーマ（low-level schema）として構文を定義する必要があると主張する。具体的には、名詞パターンの制約を取り入れた記述を提案する。c) こうした記述的スタンスに立つことで構文という説明項に対し、（認知言語学の原点とも言える）事態認知の観点からも（ゲシュタルト的ユニットとしての）妥当な位置付けを与えることができる。なお、主張 a) の論証として形式の一義的な決定が困難なことを示す。主張 b) の論証として日本語の移動や結果事象を表す文現象が名詞の意味クラスに制約されていることを示す。

次の順で考察を進める。まず、2 節では、本研究の理論的拠り所である、構文文法の問題意識と基本的主張を確認する。同時に、この枠組みの理論面、経験事実面での問題点を明らかにする。特に移動や結果事象を表す文現象（e.g. 清原が三塁に走った、パソコンがマックにかわった）から、具体的な問題提起を試みる。次に 3 節では、代替案として名詞との共起関係に基づく具体化された構文の記述モデルを提示する。同時に、本稿の方法論となる「コーパスベースの定量的手法（cf. 李 2004b）」の詳細を示す。そして、4 節では、コーパスデータの解析結果を報告する。とりわけ、（格助詞の組み合わせによる）統語パターンと名詞パターンの共起関係において、非対称性が見られた点を報告する。最後に 5 節では、本稿の分析結果が示唆する論点を明らかにする。特に日本語の項構造構文の制約のあり方について考察する。これと同時に本稿の方法論が持つ理論的意義を考察する。

2. 先行研究と問題提起

2.1. 理論的背景

本論の前に、本稿の理論的拠りどころとなる構文文法 (construction grammar) について次の点を確認しておきたい。それは、一言で構文文法といってもそれは決して単一のモデルを指し示すものではない。というのは、構文文法の場合、開発段階においてすでに (複数の研究者によって) 複数の方向性をもっていったことが指摘されている (cf. 大堀 2001)。その理論の設計においては、直接的な開発者であった Charles J. Fillmore とその共同研究者であった Paul Kay、そして良き理解者であり、多くの示唆を与えた George Lakoff などが中心的役割を果たしてきた。その際、Fillmore や Kay が HPSG (Head-Driven Phrase Structure Grammar) 流の素性・値構造 (attribute-value structure) と単一化 (Unification) という計算機構を用いて、独自の形式化を進めている一方、Lakoff はカテゴリー化の問題を中心とし、概念化のメカニズムに中核をおいた独自の議論を展開している (cf. Lakoff 1977, 1987, Fillmore 1985, 1988, 1989, Fillmore & Kay 1999, Kay 2002)¹。以下では、これらの開発者による主要な研究を紹介しながら、その基本的主張を確認する。

構文文法の提唱者であり、設計者である Charles J. Fillmore は、理論構築の中核となる「構文」(construction) に対して、以下のような見方を示した。

By grammatical construction we mean any syntactic pattern which is assigned one or more conventional functions in a language, together with whatever is linguistically conventionalized about its contribution to the meaning or the use of structures containing it.

Fillmore(1988:36)

従来の文法モデルに対する構文文法の大きな特徴は、文法をある限られた領域に制限するのではなく、意味や語用論的特徴を含む包括的な記述を目指す、というところにある。そこで重要になるのが「慣習化」のプロセスである。というのは、言語の一定の構造が慣習化によって統合された意味を帯びることは数多い。こうした事実に対する適切な分析が必要から開発されたのが構文文法であり、その基本単位が文法構文である。こうした視点をさらに一般化した場合、構文文法の理論的特徴は以下のようにまとめることができる。

Construction Grammar is a *non-modular, generative, non-derivational, monostratal, unification-based* grammatical approach, which aims at *full coverage* of the facts of

¹ ただ、construction grammarian に共通する点として、生成パラダイムが主張する自律統語論への反動者として位置づけられる。Fillmore (1988) によれば、「...construction grammars have similarities to a number of other approaches to grammar: meaning, and natural language understanding, construction grammarians differ from many other workers in the generativist tradition by their insistence on simultaneously describing grammatical patterns and the semantic and pragmatic purposes to which they are dedicated,...」と記されており、意味や語用論効果に着目した記述を行っている点において、生成パラダイムとは異なる方向性を標榜している。なお、こうした姿勢は Lakoff (1977) においても明確に表れている。

any language under study without loss of linguistic generalizations, within and across languages.
(Kay 1997:123)

上記に示されている *non-modular* であることが示唆する重要な記述的見方として、構文文法では文法を単なる形式的デバイスの集合と捉えるのではなく、形式と意味の（慣習化の結果による）結びつきと位置づけている点である。こうした記述的態度を実際の言語分析で実践していくことで、中心 (core) から周辺 (periphery) に至るまでのあらゆる経験事実を単一の記述システムで分析可能と考える²。

以上で概観した見方の妥当性を示唆するものとして、様々なものがあるが、とりわけ強調したいものとして、文現象における語用論的效果に対する記述力である。具体例として、Fillmore (1989) による分析を紹介し、その問題意識を確認したい。

- (1) a. 今晩はパーティーに行くことは行きますが、少し遅れると思います。
- b. この本は読んだことは読んだが、あまりよく分かりません。
- c. パークレーのキャンパスはきれいなことはきれいですが、少し狭いです
- d. スタンフォードのキャンパスは広いことは広いんですが、少し殺風景です。

Fillmore (1989:21)

(1) の事例は、「A ことは A」構文の具体例として記述される。この現象において重要なのは、全体の構造の解釈には語用論的情報が必要である、という点である。この構文は左の項の文 (1.a で言えば「パーティーに行く」) の真実性を認めつつ、A から相手が当然期待すると考えられること (1.a で言えば「定時にパーティに参加してくれること」) を同時に打ち消す効果を持つ。そして、節の外側において、具体的にどういう形で推意が打ち消されたか (1.a で言えば「少し遅れること」) が明記されている。すなわち、「A ことは A」構文は相手が期待することを最低限に止めさせる発話行為的力を持つ。

こうした Fillmore の観察とその分析は、理論構築の面においても重要な意味合いを持つ。とりわけ二点指摘できる。一点目に、こうした事実関係は、フォーマリズムに基づく統語論的アプローチでは扱えない問題であり、形式主義への問題提起を可能にする。というのは (1) のような現象は単純に真偽の問題として片付かないものであり、パターンの慣習化のプロセスを考慮しない限り、説明できない現象である。二点目として、言語（生成と解釈を含む）使用が非合成的であることを強く示唆している。それは (1) の文のいずれの構成要素も「打ち消し」の効果を通じてコード化しておらず、要素の合成によって全体の意味を導き出すことは困難である。以上から得られる自然な帰結として「打ち消し」の効果は「A ことは A」構文全体の統合された効果と考えざるを得ない。

こうした観察と分析の結果、言語使用が内部構成要素の単なる加算的手続きによって導

² ただし、生成的 (generative) な文法であることの理解をめぐって、次の点に注意しなければならない。構文文法が考える生成的特徴づけは、言語事実に基づくボトムアップのプロセスであるのに対して、チョムスキー流の形式主義においては、形式デバイスに基づくトップダウンのプロセスであり、両者は単純には同一視できない。

かれるものではないという発見に至った。同時に Fillmore 自身の研究文脈としてもフレーム意味論以降の一貫した立場として語用論的効果と文法構造の有機的関係が強調されるようになった。こうした見方はのちの研究として、Goldberg (1995) の項構造構文や Croft (2002) の根源的構文文法 (Radical Construction Grammar)、さらには Tomasello (2003) の言語習得研究に応用され、構文文法の汎用性が立証されることとなる。さらにはオブジェクト指向を標榜する身体的構文理論 (Embodied construction grammar: Bergen and Chang (2004)) や共起構文分析 (Collostructional Analysis: Gries 2003, Stefanowisch & Gries 2004) に代表される、実証的考察への広がりを見せ、新たな分析モデルの開発を促す結果となった。これらの多方面における検証によって構文文法は単なる語法の詳細な記述に留まらず、言語の本質を捉えるための文法理論として位置づけられた。

2.1.1. 構文効果をめぐって

本節では、構文文法の中核をなす構文の位置づけに関する問題を考察する。特に項構造構文の意味的効果に関する問題を中心に考察する。

2.1 節で例示した通り、文ないしは(広義の)複合表現においては、語や形態素といった構成要素からは直接には予測できない語用論的・意味的効果が存在する。こうした効果を捉えるためのツールとして提案されているのが構文(構成体とも)である。しかし、ここで問題になるのは、この「意味的効果」たるものがどのような条件下で観察でき、かつどのような条件を満足した場合、それが構文の意味的効果であると認定されるのか、という点である。この点を一般的レベルで捉えた場合、以下の二つの条件によって定義される(p.c. 黒田)。

条件 1: 形式 $F = \{f_1, f_2, \dots, f_n\}$ とその意味 M が対をなす。

条件 2: 全体の M が $\{m_1, m_2, \dots, m_n\}$ からの厳密な合成によって表現できない。

これら二つの条件は、次のようにパラフレーズすることができる。あるまとまった形式 $F = [f_1, f_2, \dots, f_n]$ に構文効果があると認定されるのは、 F の全体の意味 M が $\{f_1, f_2, \dots, f_n\}$ の意味の集合 $\{m_1, m_2, \dots, m_n\}$ から厳密に構成的な仕方では構築できない場合である。この定義に基づく現象記述をもっとも具体的に行ったのは Goldberg (1995, 1997, 1999) による項構造構文 (argument structure construction) の研究である。以下の (2) から考えてみよう。

- (2) a. The fly buzzed into the room.
- b. She kissed him unconscious.
- c. Pat faxed Bill the letter
- d. Pat sneezed the foam off the cappuccino

(2) の言語事実において重要なのは、文内のいずれの形式 F も全体の意味 M を直接にはコード化していない。ここで言う全体の意味 M とは、(2a) で言えば、「X MOVES TO Y」(あるもの X がある空間 Y へ移動すること)、(2b) は「X CAUSES Y TO BECOME Z」(あるもの X があるもの Y への働きかけによって、 Z という状態に陥ったこと)、(2c) は「X

CAUSES Y TO RECEIVE Z」(あるもの X があるもの Y を Z に渡し、Z はそれを受け取ったこと)、(2d) は「X CAUSES Y TO MOVE Z」(あるもの X の Y への働きかけによって Z へ移動すること)である。これらの M をめぐる記述的要請に対し、Goldberg (1995) はその中心的主張において(構成要素の個別的情報ではなく)全体の統語形式(e.g. SVO, SVOO)によって形成される情報であると結論づけた。なお、同様の現象が日本語においても存在する点を指摘したのが李(2002, 2004a)である。

- (3) a. 船が霧の中に消える。
 b. 母がトンカツにレモンをしぼった。
 c. 太郎が花子を嫁に迎えた。

(3) においては(2)と同様にいずれの F からも M を直接には予測できない。というのは、(3a)における「ある移動主がある空間の中へ移動する」ことや、(3b)における「トンカツにレモン汁を絞り落とすという使役移動」のこと、さらに(3c)における「花子が太郎の嫁になるという結果」のことを構成要素から予測することはできない。こうした事実関係をめぐる記述的戦略の一つとして、李(2002, 2004a)では格パターン(e.g. X が Y に V する)の制約としての一般化を行った。

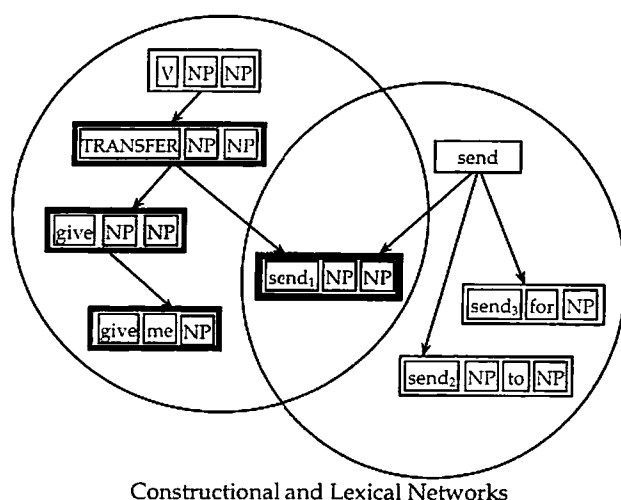
以上で例示した文全体の骨格となる意味の問題、すなわち構文効果の処理をめぐって Goldberg (1995, 1997, 1999) および李(2002, 2004a)では統語形式のまとまりが示す意味的效果として記述した。その中心的な狙いは二点ある。一点目は、文の意味における非合成的性質の体系的記述を図る。二点目は統語形式の意味論的振舞いの体系的記述を図る、ということである。

2.1.2 構文の理論的問題点

本節では、前節で示した構文効果の問題、さらには構文に対する理論的評価や位置づけの問題について考察する。

前節で示した構文効果の位置づけにおいてはいくつか本質的問題点が存在する。この点に関連し、まず確認しておきたいことは Goldberg (1995) を中心する従来の構文文法の研究において形式 F と意味 M を独立に定義可能なものという前提の上で考察を行っている³。しかし、この点は Langacker (1999) の構文スキーマのネットワーク的観点から考えてみた場合、いくつか検討の余地がある。とりわけ構文スキーマの議論において示された図 1 から考えてみよう。

³ Goldberg (1995) による構文の定義を見ると、「C is a CONSTRUCTION iff_{def} C is a form-meaning pair <F_i, S_i> such that some aspect of F_i or some aspect of S_i is not strictly predictable from C's component parts of from other previously established constructions.」(Goldberg 1995: 4) となっており、文現象において形式と意味が相互に独立していることを前提にしていると言える。



Constructional and Lexical Networks

Langacker (1999:34)

図.1

図1は、[[send][NP][NP]]という二重目的語構文の分析として示されたものである。この分析では、文における意味と形式が本質的に相互依存的であることを示唆する。それは、構文スキーマのネットワークという見方から文現象を見直した場合、どのスキーマも相互に連続的関係を示しており、意味と形式という単純な二分法では捉えにくい点である。一見すると純粋な文の形式的スキーマと考えられている、[[V][NP][NP]]という抽象的なスキーマでさえ、実際の言語使用の中では、意味を介した構文スキーマと関係づけられており、形式固有のスキーマとしては捉えられないからである。これには、「言語の形式は一義に定まらない」という根本問題が深く関係している。この点に関連し、まず確認しておきたいことは、Goldberg (1995) が二重目的語構文の定義において用いた形式「Sbj V Obj Obj₂」という抽象表示が二重目的語構文の形式的特徴付けであるという根拠はどこにも示されていない。実際 Goldberg (1995) において、構文とは文法が先験的に有するものであると位置づけており、事実上のプリミティブに還元している。この点を確認した上で、図1に戻って考えてみた場合、(左側の大円の)二重目的語構文の形式は一体何であろうか。それは、[[V][NP][NP]]であるとも言えれば、[[TRANSFER][NP][NP]]とも、[[give][NP][NP]]とも、[[give][me][NP]]とも言える。いずれでもありえることは、(他の可能性を排除できないことを意味するので)形式の実現に対して一義に定義できないことを意味する。このことから、従来の構文文法が反映すべき言語の事実として二点があげられる。1) 構文スキーマのレベルでは形式(F)と意味(M)が厳密な境界が存在しない点、2) 形式(F)の定義およびその表示が一義に定まらない点である。

以上の考察によって、形式と意味の単純な対応のみで構文を定義する手法の問題点が明らかになった。このことを踏まえ、本論では構文に対して次のアプローチを試みる。単なる形式と意味のインターフェイスを超え、事態認知との関連を踏まえた、よりボトムアップ

プ的な形で構文を定義する手法を提案する。その詳細は3節以降で示す。

2.2. 構文の記述的問題

本節では、前節の構文の理論的問題に加え、日本語の実例をベースに記述レベルで具体的な考察を行う。とりわけ譲渡を表す文現象や移動事象を表す文現象を中心に現象を観察し、そこに潜む記述的要請を明らかにする。

2.2.1. 観察Ⅰ（他動詞文において）

まず、以下の現象は従来の構文文法に対して重要な問題提起を可能にする。

- (4) a. 母が子供にケーキを焼いた。
b. 武が花子にカバンを買った。
- (5) a. 母がボールに卵を割った。
b. 台湾の人はお茶にレモンをしぼったようなものを飲んだ。

一見すると、(4)と(5)はいずれも同じ統語パターン「XがYにZをVする」を基盤にしていることや、同じ他動詞文であることから、単一の文現象であるかのように思われるであろう。しかし、両者を構文効果の観点から見直した場合、その相違は明らかである。結論的に言えば、(4)は二重目的語構文（double object construction）の具体例であり、(5)は使役移動構文（caused-motion construction）の具体例である。両者の相違点を明らかにすべく、二つの統語テストを行った。

統語テスト1: 「ZにYが渡った」事態との相関を図る

統語テスト2: 「YがZに入った」事態との相関を図る

統語テスト1は譲渡や受益可能性をテストするものであり、統語テスト2は対象の移動可能性をテストするものである。テスト1の結果をそれぞれ(6)、(7)に示し、テスト2の結果を(8)や(9)に示す。

- (6) a. 子供にケーキが渡った。
b. 花子にカバンが渡った。
- (7) a. ??ボールに卵が渡った。
b. *お茶にレモンが渡った。
- (8) a. *ケーキが子供に入った。
b. ??カバンが花子（の手?）に入った。
- (9) a. 卵がボールに入った。
b. レモン（の汁）がお茶に入った。

以上のテストによって(4)が物の譲渡を中心的意味とするのに対して、(5)は単なる空間移動を表す現象であることが明らかとなった。その論証として(6)が示すとおり、(4)では対象の所有関係が発生するのにに対して(5)においては、(7)が示すとおりそのような特徴は観察されない。ここで明らかになった両者の相違点を図示した場合、以下のように示すことができよう。

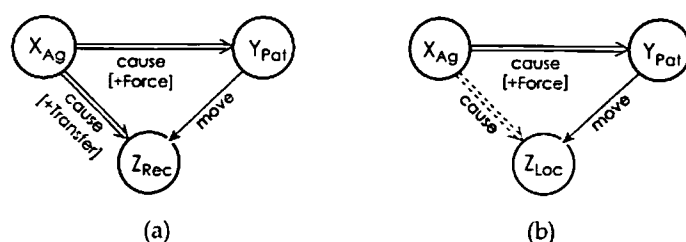


図.2

まず、図2の(a)は(4)に対応する認知事態であり、(b)は(5)に対応する認知事態である。(a)においては、動作主X(Ag: agent)が対象Y(Pat: Patient)に対して働きかけを行い、対象が受益者Z(Rec: recipient)に渡る事態が示されている。一方で、(b)においては、(a)同様に動作主から対象への働きかけが共通しているが、場所Z(Loc: Location)に対する間接的な力が働いている点において異なる。両者の違いに注目した場合、二点が指摘できる。一点目に(a)では、動作主から受益者への使役関係が明確なのに対して(b)においては動作主が場所に対して直接に働きかけることはない。二点目に(a)ではZの役割の遂行条件として有情物であることが基本となるが、(b)においては、このような制約は見られない。

2.2.2. 観察Ⅱ（自動詞文において）

前節で示した他動詞構文における分布は、自動詞文においても類似している。

- (10) a. 生徒が教室の隅に固まった。
b. 船が霧の中に消える。
- (11) a. りんごが二つに割れた。
b. 次年度の開催地がソウルに決まった。

まず、(10)や(11)はそのいずれの文も「XがYにVする」パターンにおいて生起していることを確認しておきたい。そして、他動詞文同様に統語テストを行った場合、その意味的振舞いの相違が浮き彫りになる。

統語テスト3: 「XがYへ移動した」事態との相関を図る

統語テスト4: 「XがYになった」事態との相関を図る

統語テスト3によって、運動可能性をテストし、統語テスト4によって、結果や変化可能性をテストする。テスト3の結果を(12)と(13)に示し、テスト4の結果を(14)と(15)に示す。

- (12) a. 生徒が教室の隅へ移動した。
b. 船が霧の中へ移動した。
- (13) a. *りんごが二つへ移動した。
b. ?開催地がソウルへ移動した。
- (14) a. *生徒が教師の隅になった。

- b. ??船が霧の中になった。
 (15) a. りんごがふたつになった。
 b. 開催地がソウルになった。

以上のテストから (10) においては (12) が示すとおり主体の移動を含意するのに対して、(11) においては、そのような特徴は観察されない。一方で (11) においては (14) が示すとおり対象の移動を含意するのに対して、(10) においてはそのような含意は成り立たない。こうした類似・非類似点を図示した場合、以下のように示すことができよう。

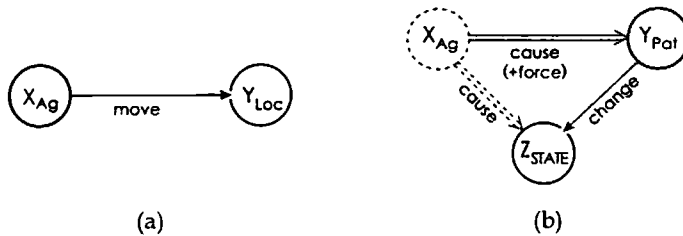


図.3

図3 (a) は (10) の認知事態を示し、(b) は (11) の認知事態を示している。前者が (12) で示した通り主体の移動を含意するのに対して、(11) は (15) が示すように、移動ではなく、状態変化を含意している。以上の観察の結果をまとめると、(4)、(5)、(10)、(11) には以下の類似・非類似点が観察される。

区分	対象の移動	譲渡/受益	結果/変化	主体の移動
(4)	○	◎	?	×
(5)	◎	×	×	×
(10)	×	×	○	◎
(11)	×	×	◎	×

表.1

表1で示した機能的特徴に基づき、特徴づけしなおした場合、(4)が二重目的語構文、(5)は使役移動構文、(10)は自動移動構文、(11)は結果構文の(現象としての)具体例として一般化できる(影山(編)2001、松本2002、李2002)

2.2.3. 記述的要請と問題提起

本節では、これまでの観察結果に対してどのような問題提起が可能であるか、そしてどのような記述を与えるべきかを考察する。この考察をもとに日本語の項構造構文の位置づけに関する示唆を与える。

さて(4)から(15)までの事実関係が明らかになった時点で、その構文効果に対し、どのような記述を与えるべきかを考えなければならない。この点に関する従来の見解は、必ずしも標準的なものがあるわけではないが、二つの分析が可能であるように思われる。第一に、狭義の語彙意味論的立場から動詞の語彙的制約から記述する動詞クラスモデルが考

えられる (cf. 影山 1993, Kageyama(ed.)1997, 影山 (編) 2001)。第二に Goldberg (1995) の分析を借用した分析モデルとして、格パターンに基づく一般化が考えられる (cf. 李 2002, 2004a)。以下では、この二つの可能性をそれぞれ検討したのち、そのいずれも日本語の事実に対して十分な説明力を持たないことを示す。

まず、第一の可能性について考察する。まず、現象レベルで確認しておきたいことは (4) の「焼く」や「買う」は動詞の下位範疇化において受益者を要請しない。同じく (5) における「割る」や「しぼる」に関しても場所句を要求しない。このことから考えて、(4) や (5) が示す全体の意味 M を動詞から記述することは困難と言える。同じく、(10) においても非対格動詞である「固まる」や「消える」の語彙の意味から移動を予測することはもちろんのこと、場所句を要求しない。こうした事実関係から動詞の項構造を仮定し、その構文効果を捉えることは有効な方法ではない。この点をめぐるより詳細な議論は Goldberg (1995) および李 (2003) に委ねる。

一方、第二の可能性についても、動詞クラスモデル同様の本質的な問題がある。最大の問題は (4) と (5) (または (10) と (11)) の相違は、統語形式の問題として記述できないところにある。それは (4) と (5) は同じ統語パターンの共有しており、両社の相違を統語パターンに還元することはできない。また、(10) や (11) においても同様の指摘ができる。となると、本研究が報告する事例における意味的效果を記述する上で、統語パターンに制約を課す分析は明らかな経験的問題に直面する。

こうした事実関係から、制約のあり方についての再考が必要となる。つまり、(4) から (15) で示した構文効果は、どのようなメカニズムから発生するのであろうか。この要請に対して、本研究は第三の分析として、名詞との共起関係から再考する。以下では、名詞との共起関係に注目する根拠を述べることで、本研究の分析モデルの正当性や利点を明らかにする。主として、この記述モデルは構文文法における理論的問題 (cf. 2.1.2 節) を回避し、2.2.1 節と 2.2.2 節の観察に対して自然な記述ができることを示す。

2.3. 名詞との共起関係を注目する根拠

項構造構文の意味の実現過程をめぐる問題を考えてみた場合、Goldberg (1995) およびその応用モデルの李 (2002, 2004a) が主張する理論的存在物としての構文は、本質的な問題点を抱えている。というのも、文の意味的振舞いを決定づける要素として名詞の意味タイプが関与していることを認めるべきであり、この点が考慮されていないことは、説明理論として重大な欠陥を持つ。例えば、(4a) と (5a) を例に考えてみたい。

(4) a. 母が子供にケーキを焼く。

(5) a. 母がボールに卵を割る。

これらの事例に関して、まず考えられる問題として、(4a) における受益や譲渡、すなわち図 2a における構文効果 (Z が Y に移動することを X が働きかけると同時に Y がそれを受け取ること) は、 Y が自らの意思で物 Z を受け取ることができることが前提となる。となる

と、Yは意志を持つ主体、すなわち「有情物」であることが一つのかなめとなる。同様に、(5a)における物の移動、すなわち、図2bにおけるZとYに移動においては、「に格」位置の名詞が持つ「容器性・空間性」に支えられている事実を考慮しなければならない。となると、(4)や(5)におけるそれぞれの構文効果の背景には、個々の名詞が示す典型的な意味クラスとしての値、すなわち「子供」が有情物であること、ボールが空間であることが全体の振舞いに大きく関与している。

こうした問題を踏まえ、さらに項役割の問題を考えてみたい。まず(4a)を例に考えた場合、従来の分析であれば「Agent, Recipient, Patient」の具現化として記述できる。このことを事態認知との関連で捉え直した場合、いくつか興味深い事実が観察される。というのは、(4a)ないしは従来の二重目的語構文の分析を見る限り、単一の事態として記述されがちであるが(e.g. X CAUSES Y TO RECEIVE Zなど)、項役割の実現過程を考慮に入れるなら、少なくとも三つの事態の複合的カテゴリーと見るべきである。

区分	認知事態	事態スキーマ
使役事態	母が卵に熱を加える	人が物に物理的な力を加える
生成事態	ケーキができる	(人の働きかけによって)物が変化する
譲渡事態	出来上がったケーキが子供に渡る	人から人へ物が移動する

表.2

表2が示唆する問題を整理してみた場合、(4a)における「母」が動作主として解釈される背景には、私たちの経験のスキーマに存在する「人」によってなされる何らかのイベントであるという情報と「母」が持つフレーム的知識ないしはICMの中から、それが有情物であるという情報が相互に結びついていなければ、そのような解釈は成り立たない。同様にケーキが被動作主として解釈される問題や、子供が受益者として解釈される問題を考えてみた場合も具体物であるという情報や有情物であるという情報が必然的に含意される。このように事態との関係で項役割の問題を問い直すなら、それには名詞の貢献度に対する正当な評価が必要となる。

筆者は、上記において指摘した問題が従来の構文文法を含む、言語分析一般において真剣に考慮されていなことは重大な問題だと認識している。文論をめぐる多くの考察が動詞のみに集中していたり、あるいは、動詞か構文かの二者択一的発想に捕らわれすぎており、言語現象における本質を見過ごしてきた。このことを問題提起すべく、本研究では名詞の意味的貢献を積極的に評価し、コーパスベースに実証的考察を試みる。

3. 代替案と方法論の紹介

本節では、上記の問題提起に対する代替案を示す。同時に、コーパス利用における具体的な方法論を示す。考察の順序として名詞を構文の定義に含める場合に生じる一般的・記述的問題を述べたあと、その解決法となる具体的な手法を紹介する。手法の紹介に際してはコーパス実験の概要を示す。

3.1. 名詞の記述をめぐる実際的問題

これまでの考察によって、名詞の貢献度を評価する試みの妥当性が示唆された。しかし、その理論的妥当性が示されたとしても、それを実際の分析に取り入れ、現象を記述するツールとして用いるには、いくつかテクニカルな問題が存在する。というのも、言語現象に対する有意義な一般化のためには、二点の問題をクリアしなければならない。

I. 名詞の数え上げによる分析のディテールの問題

II. 観察のバイアスによる偶然率の問題

本稿の分析モデルにおいてまず問題になるのは、Iの問題である。というのは、名詞というカテゴリーが持つ特徴として、1) 実際の使用に対する必要十分な定義が困難なことと、2) 有限無数のディテールが存在することがあげられる。となると、概念レベルの定義を与え、その一つ一つを記述していくのは不可能とは言わないまでも決して容易なことではない。ましては、統語パターンとの共起例を一つ一つ検討するのは、事実上不可能なことである。こうした状況において、名詞と統語パターンの共起を個別に記述していくことはあまり現実的ではない。同時にIIの問題として数ある名詞の中で、ある特定の名詞の制約を取り入れたとしてもそれが(記述のツールとしての)構文の条件を満たしているのか、という問題点に直面する。というのは、構文が構文たる地位を得るには、慣習化の結果として一定の生産性(productivity)を有するものでなければならない。もっとも、たまたま見つけた事例に対して、構文としての位置づけを与えたとしてもそれは意味ある記述にはならない。

こうした2点のクリアすべき記述的問題に対し、コーパスベースの記述モデルで解消する。具体的には、3点の方法論を導入する。a) コーパスからサンプルを収集し、b) 「日本語語彙大系」を使って個々の名詞の意味クラスを定義する。さらに、c) 統計的指標を用いて定量的に分析する(cf. 李 2004b)。a) と b) によって、上記のIの問題が解消でき、c) によってIIの問題が解消できると考えられる。

3.2. 方法論

まず、Iの数え上げ問題に対して、以下の二点の記述手法を導入する。

1. 名詞の意味クラスとして記述 (e.g. [生物]、[具体物]、[抽象物]など)
2. 名詞のパターンとして記述 (e.g. [生物—具体物]、[生物—抽象物]など)

1の導入で、名詞のディテールの問題が解消でき、2の導入で、名詞の組み合わせによる構文効果が記述できると考える。なお、2の導入に関しては黒田(未刊)に緩やかに準拠している。これら二点の手法を導入した場合の具体例を(16)に示す。

- | | | |
|------|---------------|---------------|
| (16) | a. 母が父に会った。 | → 生物が生物に V する |
| | b. 母が買い物に行った。 | → 生物が事に V する |
| | c. 母が公民館に行った。 | → 生物が場所に V する |

なお、意味クラスの判断においては、主観の混入を可能な限り排除すべく、「日本語語彙

大系」に準拠して行った。実際の意味クラスと具体例の詳細を以下に示す。

区分	意味クラス	例
「が」位置	生物	山本、社長、彼女、兄、猫、敵
	物（無生物）	案件、意味、会社、機械、アルバイト
「を」・「に」位置	主体	あなた、お前、学生、順子、他人、社長
	場所	ポケット、関西、アパート、そこ、世界
	具体物	エレベーター、手、絵巻、バス、壁、鏡
	抽象物	気、言葉、自由、恥、迷信、問題、話題
	事	仕事、生活、計算、早口、熱心、面接
	抽象的關係	1931 年、完全、極度、状態

表.3

表 3 の「が」位置の名詞に関しては、有生性 (animacy) に基づく特徴づけを行った。[+animacy]としての生物と、[-animacy]としての物（無生物）を区別する。この単純な特徴づけの背景には、日本語の主語の特徴として有生性が関与していることを構文レベルで捉えるためである (cf. 尾上 2001)。次に、「に」や「を」位置の名詞については、「日本語語彙体系」のシソーラス体系に準拠し、特徴づけを行った⁴。

最後に、表 3 の位置づけに関連し、次の点に注意を喚起したい。ここでの意味クラスはすべての現象に対して万能であることを保障するものではない。あくまで図 2 で示した構文効果を捉えるためという目的のもと開発されたものである (cf. 李 2004b)。

次に、Ⅱの問題として、(有意義な) 構文の認定に関する問題がある。この問題に対し、本稿では、以下の二つの記述的手法を導入する。

1. コーパスから安定したサンプル収集
2. 統計的指標 (T-score 法) による評価で慣習度を測る

1 によって観察のバイアスの問題が解消でき、2 によって偶然率の問題が解消できると考えられる。特に 2 においては、格パターンと名詞パターンの共起の強さを測ることで非対称的關係を明らかにする。その詳細は、次節以降で紹介する。

3.2.1. 使用データ

本稿では、解析に際して、新潮社の小説テキスト 6 冊分からそれぞれ 5000 字を抽出し、3 万字のミニコーパスを作成した。そこから「に」の KWIC 検索を実行し、助詞「に」を文単位のサンプルを収集した。その詳細を表 4 に示す。

⁴ それぞれの意味クラスはカテゴリ変数ではないので、相互排他性は持たない。例えば「心」に関しては抽象物でもあり、事でもあり、抽象的關係でもあると判断する。

区分	KWIC 検索	データクレンジング
宮本輝『錦繡』	134 例	102 例
塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』	128 例	96 例
五木寛之『風に吹かれて』	125 例	93 例
村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』	124 例	94 例
椎名 誠『新橋烏森口青春篇』	122 例	95 例
赤川次郎『女社長に乾杯』	117 例	93 例

表.4

なお、データクレンジングにおいては語中の「に」(e.g. こんにちは)や形容動詞の活用形の「に」(e.g. きれいになった)を取り除いた。最終的に得られたサンプル数は、6 冊分から 573 例(一冊平均 95 例)である。

3.2.2. 分析方法

表 3 のサンプルに対して、最初に行った作業は、サンプルが含む、2109 個の名詞の意味クラスを特定した。そして、統語パターンと名詞パターンの共起数を計上していった。その結果、84 タイプの共起関係が観察された。その一部を以下に示す。

SP (統語パターン)	NP (名詞パターン)	共起数
X が Y に	生物-主体	19
X が Y に	生物-場所	50
X が Y に	生物-具体物	14
: :	: :	:
X が Z を Y に	生物-抽象的關係-主体	7
X が Z を Y に	生物-抽象的關係-場所	13
X が Z を Y に	生物-抽象的關係-抽象的關係	10
: :	: :	:

表.5

次にこれらの共起に対する信頼度を評価すべく T-スコア⁵を用いて、共起の強さを測定した。

$$\frac{\text{共起数} - \frac{\text{SP} \times \text{NP}}{\text{総数}}}{\sqrt{\text{共起数}}}$$

計算式.1

⁵ t 検定の手法を応用して、二つの単語の共起関係(相互の結びつき)の強さ(の確信度)を計る指標の一つ。MI スコアと比べ、単語の頻度も考慮に入れており、単語の頻度が少ない場合でも適切に判断できるといわれている。

一般に計算式 1 によって、名詞パターンと統語パターンの結びつきの強さを計ることができる (cf. 斎藤 (編) 1998, Gries 2003, Stefanowitsch & Gries 2004)。本研究では、個々の共起値は慣習化度合の指標であると位置づけ、定着度の差として解釈する。

4. 結果

本節では、前節の方法論を用いて、コーパスデータを解析した結果を報告する。4.1 節では、二項関係 (e.g. X が Y に、Y に X が) における共起度の上位 10 項目を報告し、4.2 節では三項関係 (e.g. X が Y に Z を、X が Z を Y に) における上位 10 項目の共起度を報告する。

4.1. 二項関係に見られる共起度

二つの項による構文現象の共起関係を計った結果、表 6 が得られた。とりわけ、上位 10 項目を示す。

共起パターン	頻度	T-score
a. 生物ガ場所二	50	4.0437
b. 物ガ抽象的關係二	30	2.4563
c. 生物ガ事二	28	2.2628
d. 生物ガ抽象的關係二	28	2.2506
e. 場所二物ガ	19	1.354
f. 生物ガ主体二	19	1.338
g. 物ガ事二	17	1.1104
h. 物ガ場所二	15	0.8520
i. 生物ガ具体物二	14	0.715
j. 物ガ抽象物二	13	0.5963

表.6

表 6 のスキーマに対応する具体例を 17 に示す。

- (17)
- a. ぼくが百貨店ニュース社に入ったのはまったくの偶然だった。
 - b. 六世紀半ば、東ローマ帝国の勢力圏が最大に達したのである。
 - c. 最近の会社の営業活動について彼はかなりの早口に喋りだした。
 - d. 当時二十五歳だった私も三十五になりましたが、
 - e. 暗い空に巨大なお化け煙突の影が見えた。
 - f. 山本は、今日も純子に会えるという、それだけを楽しみに、会社へ向かう
 - g. 一都市の陥落が一国家の滅亡につながる例は…。
 - h. ビザンチン領であるマケドニアも、属国になって年貢金と…。
 - i. 男は電話に出た。
 - j. 機械の故障や係員の不注意が現実には起り得ないと言っているわけではない

表6および17の例が示す通り、「XがYに」の使用においては、ある生物Xが場所Yに何らかの動作を行う、という経験のスキーマを具体化することがもっとも多い。次に続くものとしては、ある物Xが抽象的な状態Yに陥るという経験のスキーマを具体化している。そして、三つ目として、ある生物Xが事ないしは状態Yを遂行する経験のスキーマを具体化している。なお、一般にT-scoreは基準値2を満たさない場合は、たとえ共起頻度が多くでも一方の高頻度による偶然である可能性が高く、統計的には意味をなさないものと解釈される(斎藤(編)1998:140)。これに照らし合わせて考えてみた場合、二項関係において慣習化された構文はaからdまでと結論づけることができる。

これらの事実関係は従来の枠組みで分析した場合、aが2.2節の(10)で報告した自動移動構文であり、bが(11)で報告した自動詞結果構文、cは状態構文、dは自動詞結果構文に該当する。この対応関係の理論的位置づけの詳細は、5節で考察するが、一先ず、英語研究で言われてきた項構造構文が日本語においても独立に定義可能であることが確認できた。

4.2. 三項関係に見られる共起度

三つの項による構文現象の共起関係を計った結果、表7が得られた。上位10項目を示す。

共起パターン	頻度	T-score
a. 生物が場所二具体物ヲ	12	2.460
b. 生物が具体物ヲ場所二	10	2.159
c. 生物が具体物二具体物ヲ	10	2.158
d. 生物が具体物ヲ具体物二	8	1.825
e. 生物が具体物ヲ抽象的關係二	6	1.447
f. 生物が抽象的關係二具体物ヲ	6	1.446
g. 生物が主体二具体物ヲ	5	1.234
h. 生物が主体二抽象的關係ヲ	4	0.998
i. 生物が抽象的關係二事ヲ	4	0.998
j. 生物が場所二場所ヲ	3	0.730

表.7

前節同様表7の具体例を(18)に示す。

- (18)
- 壁に粘土をなげつけたときのような扁平な音が聞こえた。
 - 先を回って、薬を箱に補給したり、集金したりする帳面である。
 - 山本はせっせと髪にクシを入れ、出社の支度を急いでいた。
 - 父は経済紙を手に取りながら、…。
 - 出っ張りを削り、真ん丸な顔を長目にこね直し、
 - 荒井は嬉しげに茶碗を妻の方へ差し出しながら、…。

- g. 私は体の不自由な自分の息子に、清涼な山のたたずまいやたくさんの星々を見せてやりたくなりました。
- h. あなたはやがて何気なく私に視線を向け、
- i. 動けないとなると途端に痙攣を起こして、
- j. 高根は上野の近くの自宅敷地に蛇舎を設け、

この結果から、日本語の三項関係において、もっとも安定しているのは、ある生物 X がある場所や具体物の Y に別の具体物 Z を移動させる事態と関係づけられる構文タイプである。すなわち使役移動構文としての使用がもっとも顕著と言える。ただ、本稿が用いたデータにおいては e や f に見られる結果構文、g や h に見られる二重目的語構文としての使用には統計的有意差は見られなかった。また a と b、c と d はいずれも単なる語順交替によるものであり、二者における差も観察されなかった。

5. 考察

本節では、5 節の解析結果が日本語の構文現象に何を示唆するのかを考察する。同時に、本研究における理論的含意を明らかにし、新たな構文モデルを素描したい。

5.1. 項構造構文に対する示唆

本稿のコーパス解析による成果として、強調して置きたいことは二点ある。一点目は、統語パターンと名詞パターンの共起における有意差が見られた点である。二点目は統計的な有意が認められるレベルで現象を切り取った場合、上位にランクするものはいずれも項構造構文として指摘された現象の典型的なパターンである。前者によって構文のカテゴリー化における非対称性が示され、後者によって項構造構文の実在が確認できた。具体例として「X ガ Y ニ V する」パターンと名詞の共起を考えてみた場合、12 通りの共起関係が予測される。

- | | | |
|---------|-----------------------------------|------------|
| (19) a. | あなたはまだ私に気づかず、・・・ | →生物ガ主体二 |
| b. | じゃ、もう私は会社に行かなくていいんだ。 | →生物ガ場所二 |
| c. | 私は山本と違って、バスに乗る前に・・・ | →生物ガ具体物二 |
| d. | 私がその問題にかかわらねばならないことが、 | →生物ガ抽象物二 |
| e. | 彼は我々との意図不明な共同生活に加わった。 | →生物ガ事二 |
| f. | 純子が学生時代に会得したもので、 | →生物ガ抽象的關係二 |
| g. | 男の目を一瞬引きつける派手やかさが純子には
具わっている | →物ガ主体二 |
| h. | ホテルは温泉町からぼつんと離れた別の山並の
斜面に建っている | →物ガ場所二 |
| i. | 私の耳のかたちが壁に白く残っただけだった。 | →物ガ具体物二 |
| j. | 係員の不注意が現実に取り得ないと言っている | →物ガ抽象物二 |

- k. 一都市の陥落が一国家の滅亡につながる例 → 物ガ事二
- l. それはダイヤモンド並みの硬度に達しているに → 物ガ抽象的關係二
 違いなかった

ただ、理論的予測から 12 通りのパターンが考えられたとしても慣習化や定着度の面においては質的相違が見られる。例えば、a と b を取り上げてみた場合、前者の共起指数が 1.338 で基準値 2 を満たないのに対して、後者の共起指数は 4.0437 で、非常に生産的であることが分かる。また、表 6 や 7 の T-Score において上位にランクづけされているいずれの事例も項構造構文の具体例であることは、間接的ながら次の見方を示唆する。それは、日本語における項構造構文が統語パターンと名詞のパターンの共起関係を計ることで（近似として）特定できる。このことから、一般化するなら、日本語において統語パターンと名詞パターンの共起に基づく項構造構文の定義は、重要な切り口の一つであると言えよう。

5.2. 本研究の理論的含意

本研究の分析手法となる、統語パターンと名詞パターンの共起関係による構文の再定義は重要な理論的含意を持つ。それは、二点としてまとめることができる。一点目に、言語表現に見られる共起関係の特殊なケースとして構文を位置づけること⁶。二点目に、グラウンディングされたレベル、すなわち下位レベルスキーマ（low-level schema）として構文を定義することである。これらの理論的含意を 2 節の問題提起と関連付け考えてみたい。

Goldberg を中心とする従来の構文文法では、構文を抽象的・理論的存在物として特徴づけた。しかし、この種の分析においては言語の本質として形式が定義困難である、という事実を無視しており、形式と意味のペアとして（抽象的レベルで）構文を定義する手法は、多くの言語事実を捨象することによって可能なアプローチである。そして、こうした方向づけは身体基盤主義を標榜する認知言語学の立場と部分的な矛盾を生じさせる。

この矛盾点を解消するため、本稿は形式と意味の絶対的・先見的な相違を設けないこと、よりグラウンディングされたレベルにおいて構文を再定義することが必要と提案する。その具体的な記述法の一つとして、名詞の意味クラスと統語パターンの共起関係に基づく、新たな一般化を試みた。こうした試みが意図する構文の新たな位置づけを事態認知との関連で示した場合、以下のように図示できる。

⁶この主の方向づけは Gries (2003), Gries and Stefanowitsch (2004) によっても実践的になされているので合わせて参照されたい。

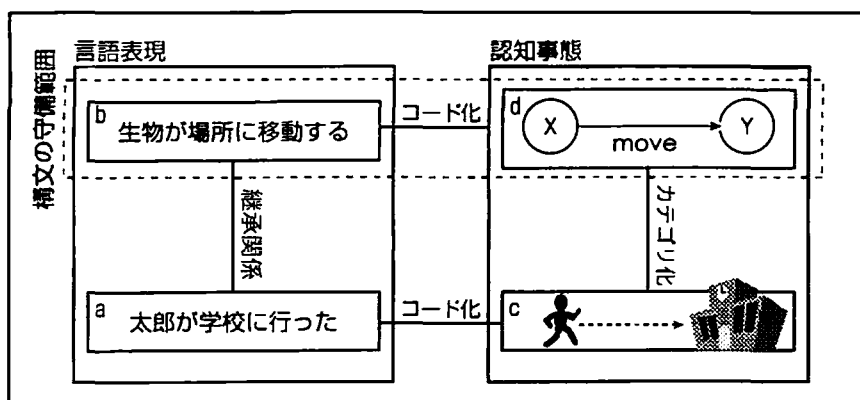


図4

図4では、本研究が意図する構文の（研究プログラムとしての）理論的位置づけを大雑把に示した。それは、aの実際の発話に対して、bの記述ツールとしての構文を特定する。そして、bは、経験世界における経験の理想化されたスキーマdと関係づけられる。なお、aとbの関係は、多くの単層文法において用いられている継承（inheritance）関係にあるものと位置づけられ、cとdは経験世界におけるカテゴリー化の関係にあるものと位置づけられる。また、構文文法の記述的射程はbによるdのコード化に対する諸現象を記述することである。というのは、筆者が理解する限り、構文文法が進むべきもっとも健全な方向は（従来のシンタクティックなアプローチに対して）意味論や語用論を取り込んだ文文法のモデルを構築することである。この点を考慮した場合、構文文法において重要なのは、bとdの関係に対する精緻化が望まれると言えよう。最後に、本稿が行ってきたコーパス解析による分析は、aからbを特定するためのものであった。そして、図2と図3において考察したのは、bとdの関係であった。

6. 最後に（まとめと今後の課題）

本研究では、従来の構文文法を批判的観点から検討し、名詞の意味クラスと統語パターンの共起関係による分析モデルを提示した。その際、発生する記述的ディテールの問題に対して、コーパスデータに対する統計的指標を用いることで解決できることを示した。これにより、構文の認定基準に対する実証的方法論を提示した。

また、解析結果が示唆する事実として日本語の項構造構文は名詞と統語パターンがシステマティックに連動することで運用されていることが明らかになった。これによって、従来の（名詞の貢献度を捨象した）項構造構文の分析は言語事実に対する不十分な記述であることが示唆され、名詞の意味クラスを構文の定義に含めなければならないことが示された。そして、本稿の理論的見通しとしてグラウンド化されたレベルで構文を定義することを狙っており、これによる最終的な利点として身体化された構文の定義が可能となることを示唆した。

〈参考文献〉

- Bergen, Benjamin, Nancy Chang, and Shweta Narayan. (2004) . "Simulated Action in an Embodied Construction Grammar." Proceedings of the Twenty-Fifth Annual Conference of the Cognitive Science Society. (<http://www2.hawaii.edu/~bergen/papers/BCN04.pdf>)
- Boas, Hans Christian (2003) *A Constructional Approach to Resultatives* (Stanford Monographs in Linguistics) . Stanford:CSLI
- Croft, William. (2002) *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles J. (1968) "The case for case", in E.Bach and R.T.Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston, P.1-88
- Fillmore, Charles J. (1985) "Syntactic Intrusions and the Notion of Grammatical Construction". *BLS* 11. pp.73-86.
- Fillmore, Charles J. (1988) "The mechanisms of Construction Grammar". *BLS* 14. pp.35-55
- Fillmore, Charles J. (1989) 「『生成構造文法』による日本語の分析一試案」、柴谷方良・久野すすむ編『日本語学の新展開』、東京: くろしお出版. pp.11-28.
- Fillmore, Charles J., Kay, Paul & O'Connor, Mary Catherine (1988) "Regularity and Idiomaticity in grammatical constructions: the case of *let alone*", *Language*, 64, pp. 501-538.
- 藤井聖子 (2001) 「構文理論と言語研究」、『英語青年』Vol.147, No.9, pp.536-541, 東京: 研究社.
- Goldberg, Adele, E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上誓作 他(訳)『構文文法論』、東京: 研究社、(2001.))
- Goldberg, Adele, E. (1997) "The Relationships between Verbs and Constructions". in Eve Sweetser and Kee dong Lee. (eds.) *Lexical and Syntactical constructions and the Construction meaning*. Amsterdam: John Benjamins Publishing. pp. 383-397.
- Goldberg, Adele, E. (1998) "Patterns of Experience in Patterns of Language", in Michael Tomasello (ed.) *The New Psychology of Language*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 203-220.
- Goldberg, Adele, E. (1999) "The Emergence of the Semantics of Argument Structure Constructions." in Brian MacWhinney. (ed.) *The Emergence of Language*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. pp.197-212.
- Goldberg, Adele, E. (2002) "Surface Generalizations: an alternative to alternations," *Cognitive Linguistics* 13(4), pp.327-356.
- Gries, Stefan Th. (2003) Towards a corpus-based identification of prototypical instances of constructions. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 1. pp.1-27.
- Gries, Stefan Th., and Anatol Stefanowitsch. (2004) 'Extending collostructional analysis: a corpus-based perspective on 'alternations''. *International Journal of Corpus Linguistics* 9.1: 97-129. (<http://www-user.uni-bremen.de/~anatol/publications.html>)
- Hunston, S. and Francis, G (1999) *Pattern Grammar - A Corpus Driven Approach to the Lexical Grammar of English*, Amsterdam: John Benjamins.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』、東京:くろしお出版.
- 影山太郎(編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』、東京:大修館書店.

- Kay, Paul. (1997) *Words and the Grammar of Context*. Stanford, Calif.: CSLI Publications
- Kay, Paul. (2002) "An Informal Sketch of a Formal Architecture for Construction Grammar". *Grammars* 5, pp.1-19.
- 黒田 航 (未刊) 「日本語の Pattern Matching Analysis の簡単な実例」
(<http://csl.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kuroda> で入手可能)
- Lakoff, George. (1977) "Linguistic gestalts." In *Papers from the Thirteenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp.236-287, Chicago.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作 他(訳)『認知意味論』、東京: 紀伊国屋書店、(1993.))
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. I, Theoretical Prerequisites*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. II, Descriptive Application*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) "A Dynamic Usage Based Model". in Barlow, Michael. and Suzanne Kemmer (eds.) (1999). *Usage Based Models of Language*. Stanford: CSLI Publications. pp.1-64.
- 李在鎭 (2002) 「構文の意味的動機付けに関する一考察: 「X が Y に V する」を例に」, 『日本言語学会 124 回研究大会予稿集』, pp. 226-231.
- 李在鎭 (2004a) 「認知事象の複合的制約に基づく結果構文再考—構文現象の体系的記述を目指して—」, 『認知言語学論考 No.3』、ひつじ書房、pp.183-262
- 李在鎭 (2004b) 「助詞「に」の定量的分析への試み: 語法研究の新たな手法を求めて」, 『日本認知言語学会論文集 No.4』、pp.55-65
- Michaelis, Laura A. (2003) "Word Meaning, Sentence Meaning and Constructional Meaning." In H. Cuyckens, R. Dirven and J. Taylor, (eds.) , *Cognitive Perspectives on Lexical Semantics*. Amsterdam: Mouton de Gruyter. pp.163-210.
- Michaelis, Laura A. and Josef Ruppenhofer. (2001) . *Beyond Alternations: A Constructional Model of the German Applicative Pattern*. Stanford: CSLI Publications.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』、くろしお出版.
- 斎藤俊雄、中村純作、赤野一郎 (編) (1998) 『英語コーパス言語学—基礎と実践』、研究社.
- Sag, Ivan A., and Thomas Wasow. (1999) . *Syntactic Theory: A formal introduction*. Stanford: CSLI
- Stefanowitsch, Anatol. (2003) A construction-based approach to indirect speech acts. In Klaus-Uwe Panther and Linda Thornburg (eds) , *Metonymy and Pragmatic Inferencing*. Amsterdam and Philadelphia: Benjamins, 105-126
- Stefanowitsch, Anatol, and Stefan Th. Gries. (2003) Collostructions: investigating the interaction of words and constructions. *International Journal of Corpus Linguistics* 8.2: pp.209-243 (<http://www-user.uni-bremen.de/~anatol/publications.html>)
- Tomasello, M. (2003) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard

University Press.

Yamanashi, Masa-aki. (2001) "Speech-Act Constructions, Illocutionary Forces, and Conventionality," in D. Vanderveken et al. *Essays in Speech Act Theory*, pp.225-238, Amsterdam: John Benjamins.

〈言語資源〉

- ・ 新潮社、「CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊」
- ・ NTT コミュニケーション科学基礎研究所、『日本語語彙大系 CD-ROM 版』、岩波書店.